

入山川並木沢山行報告書

- 【山 域】 西上州
【コース】 入山川並木沢
【日 時】 平成28年11月6日（日曜日） 前夜発
【天 候】 晴れ
【参加者】 CL：上茂 メンバー：花島（記録）
【コスタム】 赤浜集落 7:00～並木沢入渓 7:20 ～ 30m 大滝 8:15-9:00 ～40m 大滝 10:20-11:00～
谷急山 13:15～赤浜集落 16:15

【山行報告】

「今年の沢納め、何処にする？ たき火もしたいね。紅葉も鍋も宴会も・・・」って話をしていたが、このところの急な冷え込みで意気消沈し、ふたりで妙義の沢に行く事になりました。

妙義の沢は、何となく水量が少なく、落ち葉に埋もれて、谷が狭く暗いイメージしかないので、寂しい沢納めになりそうな予感がありましたが、並木沢を調べてみると地形図に滝記号とともに滝の名前も載ってる登攀的な沢で、送られてきた計画書にハーケン、カムの文字。「ヤバイ。上茂さん、気合い入ってる。」写真を見たり、記録を読むとへこむので、滝を見に行くくらいの気持ちで出かける事にしました。

土曜日の夜、千葉を21時に出発し、甘楽PAで時間調整をして道の駅妙義で仮泊する。先着の星穴パーティーと合流してちょっと酒盛りして就寝。5時半に起床し、星穴パーティーの見送りを受けて出発する。昨夜は一個のおにぎりさえなかったコンビニへ。今朝は大丈夫、揃っている。ここで朝食も済ませる。

入山場所近くに適当な駐車スペースがなく、赤浜集落手前の路肩に駐車する。入牧橋から入渓の記録もあり、行ってみるが、ただの河原っぽかったので、登山道から行くことにする。民家の脇を抜けて並木沢左岸の林道を辿り、並木沢を横断する渡渉点から入渓する。



（入渓点：登山道の沢横断箇所）



（高巻きからの牛名の滝）

すぐに“牛名の滝”が見えてくる。登るなら左壁だが、落ち口手前が被り気味で落ち口の様子もわからない。ってことで巻き、巻き。

昨夜、星穴パーティーとの酒盛り時に、富樫さんの「事故を起こすなら沢」の言葉が重い。今日一日を通してリフレインされることになる。

危険要素の排除において、沢は事故の要素が多く安全対策も限定されたもの

になりがちなので、判断ミスが命取りになる。今日は止める勇氣と言うより弱氣の虫が勝っている感じた。ナメや軽いへつりを過ごすトイ状に細々と流れる落ちる30mの大滝に到着する。



(滝記号のある30m大滝)



(高巻き 最後のトラバース)



(大滝直後のナメ)

しっかりした木もあることだし、取り付いてみる。木から先、水流に向かうトラバースは完全に外傾しホールドも見当たらない。

かといって左を直上するルートも“悪そうだね”とふたりの見解が一致したので懸垂で降り、右岸の2本手前のルンゼから尾根に移り木登りでさらに直上する。

沢に戻れるか心配になる頃、ようやくトラバースできそうなルートを見出す。うまい具合に木も生えていて、滑ってもすぐ掴めそうなので怖さもあまり感じない。

適当に木を拾いながらトラバースして、無事に並木沢に戻れた。大滝のひとつ上の滝もいっしょに巻いたようだ。降りたところからはナメが始まる。



(二俣に掛かる滝)

やがて左岸からほぼ直角に15m階段状の滝が掛かっている。二俣は、顕著な尾根で分岐していると思込んでいたので、まさかこんな形(滝)で入ってくるとは思ってもみなかった。あやうく通り過ぎるところだった。地形図と遡行図で確認をすると、間違いなく、ここだ。高度も合ってる。階段状といっても濡れて外傾してるので、又メリがあり、一歩一歩慎重に登る。



(上から見たところ)



(40m大滝)

程なく二つめの大滝が姿を現す。ルートを追っても全体が濡れて黒々と光って、残置が見当たらない。上茂さんが釜の左から取り付き、とりあえずハーケンを打って直上するルートを探るも断念。代わって花島が右に大きく回り込んで水流の右にハーケンを打ってバンドまで上がる。さらに上は一見して残置もなく、ハーケンも2枚しか用意していなかったため、落下が怖くてとても登れる気がしない。上茂さんにハーケンを回収しながら上がってもらおう。トップを上茂さんと交代し、ハーケンを打ってA0で越えると、やっとつぶれた残置ハーケンがあった。そのまま、支点になりそうな木まで登って、ピッチを切る。



(2ピッチ目)

さらに1ピッチあるが、この先が核心らしいので、もう限界。ビビりもあって左へ逃げる。それでも一部立っているの、ロープを使って滝上に出る。もう安心、あ〜怖かった。

まだ昼前なのに光の射し具合と言ひ、寒さと言ひ夕方の雰囲気とする。あとは落ち葉を踏みしめ、ナメを堪能しながら詰めるだけのハズでしたが・・・。
振り返ると紅葉に彩られた山に岩峰が突き出ている。いかにも妙義らしい景色だ。

850mの二股で詰めのルートを確認する。
岩記号の無い、谷急山の北方へ伸びる尾根の鞍部に突き上げている右俣を詰める事にする。



(出だしは傾斜の緩いナメからスタート)

始めは落ち葉の積もるナメや階段状の小滝だったのが、見上げると壁、壁、壁。どこまで続くかと呆れるばかりで、ため息しかでない。



(ヌメヌメ滝の連続)

岩は濡れていて滑り易いし、落ちたらどこまで落ちるんだろう。
横を見ても巻けそうなところが無い。登るしかなさそうだ。
慎重に一步一步確実に登っていく。稜線はそこに見えるのに遠い。



(止めの壁 ここで右の尾根筋に逃げました)

傾斜のきついスラブ滝は、わずかに残ったフェルトでは、足元が滑り、辛い。
お助けロープを垂らしてもらい、なんとか抜ける。
戦意を喪失させる壁を前に、ようやく、稜線まで続いてそうな急ではあるが登れそうな斜面が出てくる。
まばらに生えた木を目指し、次はその木まで、次はその木までと決めて詰め上げ、一面の落ち葉を踏みしめて、ようやく谷急山から北へ伸びる尾根に到着する。



(稜線直下のツメ)

詰め上げた稜線から15分程で谷急山に辿り着く。



(浅間山をバックに谷急山頂上)

ここからまだ3時間の下りが待っている。三方境までは痩せ尾根、ロープ、鎖の連続で気が抜けない。三方境からの登山道はあまり整備されていないようで、わかりづらいところがありました。



荒船山や妙義の岩峰、紅葉を楽しみながら、なんとか明るいうちに下山できました。

以 上